

3. 免疫不全症のモニタリングに関する研究 小委員会のまとめ

分担研究者	小	林	登
研究協力者	矢	田	純 一
	岸	本	忠 三

本小委員会は、班員小林登、協力者矢田純一、岸本忠三より構成し、早川浩（東大小児科）を事務連絡者として編成した。

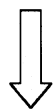
初年度（昭和54年度）の研究計画として、原発性免疫不全症候群のわが国における実態調査（小林担当）、免疫不全症のスクリーニング法の開発と試行（矢田担当）、病態の生化学的ならびに細胞生物学的研究（岸本担当）などについて研究を開始することとした。

わが国における実態調査については、厚生省特定疾患調査研究とも協同して施行したが、合計 531 例の原発性免疫不全症候群の登録を得た。おのおのの病型における実態、検査資料の分析等は次年度以降の作業に待つこととなった。これらの症例の中、いわゆるスクリーニング法の施行（ガンマグロブリンの測定、ADA 欠損症の検索など）によって発見された事例は未だ極めて少数であるが、どのような検索が発見の糸口となっているかについて、次年度少し詳しく検討してみる予定である。

原発性免疫不全症を早期に診断する一方法として、臍帯血リンパ球を検討する方法が考えられるが、その基礎資料として、正常新生児における臍帯血リンパ球の各種機能を研究する必要がある。

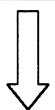
協力者矢田らは、このテーマを研究し、別述のような成人との差異についての知見を得た。さらに病的新生児における知見を加えれば、免疫不全症スクリーニングに資する方法を開発する期待がもてる。

協力者岸本らは、細胞融合法により、モノクローナルなリンパ球亜分画に対する抗体を作製するための基礎的検討を行った。このような方法によりモノクローナル抗体を作製する可能性を確かめ、これを用いて将来リンパ球の亜分画を同定するより確実な方法を開発しうることを知った。そのような方法が実用化されれば、原発性免疫不全症の病態の分析・診断のために、飛躍的な進歩が得られるだろうことが期待された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



本小委員会は,班員小林登,協力者矢田純一,岸本忠三より構成し,早川浩(東大小児科)を事務連絡者として編成した。